

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：33801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730500

研究課題名(和文) 災害と開発の環境社会学的研究

研究課題名(英文) Study of Environmental Sociology concerning Disaster and Development

研究代表者

山本 早苗 (YAMAMOTO, Sanae)

常葉大学・環境学部・准教授

研究者番号：40441175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グローバル化による定住と移動のダイナミズムを背景に、現代中国社会において災害と開発を契機にローカルな社会に形成される災害文化/開発文化に着目することで、あらたな社会関係が構築されていく過程と社会的排除のしくみについて環境社会学的に分析することを目的とする。具体的には、西部大開発の住民参加型開発プロジェクトおよび住民による災害復興プロセスに注目して、社会変動のメカニズムとローカルな社会関係が再構築されるプロセスを考察した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the mechanism how the national development projects and disasters related to social development and social exclusion in contemporary Chinese society. It focuses on the dynamism of the settlement and movement in the global economy, through considering a case study of the Western Development in Gansu province.

研究分野：社会学

キーワード：西部大開発 災害文化 開発文化 コミュニティ 政治性 中国

1. 研究開始当初の背景

グローバル化は、経済・政治・文化など広範囲にわたり深く浸透するにしたいが、領土や資源をめぐる争い、民族紛争の激化、貧富の格差、深刻な環境破壊を引き起こしている。近年、中国は、急速な経済発展を遂げて国際的な発言力を高め、諸外国と安全保障上の問題を抱える一方で、国内には東西格差や民族問題、相次ぐ大規模な災害と環境破壊など深刻な社会問題をいくつも抱えており、これらの矛盾をいかに解決していくのか注目を集めている。

そこでの一つの課題は、これまでの都市/農村という二分法的視点に対して、都市と農村を往復しながら移動生活を営む人びとが形成するコミュニティに注目することで、民族間の包摂/排除の関係および文化混淆の実態を明らかにし、転換期における社会変動のダイナミズムを理解することである。これらを明らかにすることを通じて、中国の開発/環境(災害)政策のもと、民主的なしくみを目指すローカルな人びとの主体性を捉え、地域を超えていくコミュニティのダイナミズムを理解することが可能になる。

本研究が対象とする中国西北部は、シルクロードを介して東西交易の要衝として栄えた悠久の歴史をもち、今なお多民族が集住雑居する地域である。

しかし1978年の改革開放以降、沿岸部(東部)と内陸部(西部)の経済格差は拡大し続け、2000年から東西格差是正と西部の資源開発を目的に、西部大開発戦略が本格的に着手された。西北部は災害常襲地帯とされているが、これは自然災害によるだけでなく、過剰な開発や地域文化を考慮しないトップダウン型の国家開発がもたらした人為的災害でもあることが多くの研究者により指摘されている(小長谷ほか2005)。これまで災害や開発によるローカルな伝統

文化の変容や衰退を論じた研究は多いが、災害や開発を契機に社会変動を促進するローカルな願望がいかに形成され、ローカルな主体によって既存の社会関係がどのように再構築され、あらたなローカルなくみや法制度へと接続されてゆくのかという、その災害文化/開発文化形成のメカニズムは解明されていない

2. 研究の目的

本研究は、グローバル化による定住と移動のダイナミズムを背景に、現代中国社会において災害と開発を契機にローカルな社会に形成される災害文化/開発文化に着目することで、あらたな社会関係が構築されていく過程と社会的排除のしくみについて環境社会学的に分析することを目的とする。

具体的には、西部大開発の住民参加型開発プロジェクト(具体的には棚田建設プロジェクト)および住民による災害復興プロセスに注目して、社会変動のメカニズムとローカルな社会関係が再構築されるプロセスを考察する。この事例から、開発や災害によるコミュニティの修復不能な改変を予防し、拡大し続ける貧富の格差に対処し、排除/差別される人びとを援護するローカルな知のメカニズムを解明することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、「開発文化と災害文化」、「定住と移動」という二つの対立軸を設定して、国家開発や災害に対応してローカルな社会関係が再構築されるメカニズムを考える。現代中国社会における環境問題の解決という実践的課題については、ローカル・コミュニティや移動生活者のネットワークなど中間集団に注目することにより、地域社会システマ的解決への基本モデルおよび理論

の発展に貢献することが本研究によって期待される。

本研究では、現地に住み込むフィールド調査を主体に、政府等関係機関での資料収集、中国西北地域研究者とのネットワークを生かした情報共有により調査を進めた。具体的には、西部大開発が引き起こした自然災害（具体的には水害、地すべり）に直面し、復興した地域を対象として、現地調査による資料収集と聞き取り調査を行った。

本研究が調査対象とするのは、中国西北部に位置する甘肅省定西市およびその主要な出稼ぎ先である新疆ウイグル自治区ハミ市と北京である。甘肅省定西市は人口 290 万人を抱える国内の最貧困地域のひとつであり、毎年、「水土流出」とよばれる地すべりや水害に悩まされている災害常襲地帯でもある。

4. 研究成果

中国西北部では、国内の東西格差に対応するために、人びとは移動生活を営みながらローカルな復興を実践している。それゆえ本調査においては、国家開発の拠点であり災害常襲地帯でもある中国西北部甘肅省での調査に軸足をおきながらも、かれらが出稼ぎなど移動の対象としている新疆ウイグル自治区と北京でも聞き取り調査をおこない、比較検討を行った。これらの調査の結果、明らかになったのは、以下の通りである。

1) 開発文化の生成メカニズム：

西部大開発の住民参加型開発プロジェクト（棚田建設）が、ローカルな社会関係にどのような矛盾をもたらし、それに対して人びとがいかに対応しているのかを明らかにした。具体的には、

a) 国と行政の資料から、住民参加をめぐる合意形成のしくみと抱えている問題点を整理

した。

b) 住民への聞き取りと資料を通じて、開発実施過程において、農村部の多民族間における協調関係や対立関係の形成過程を明らかにした。漢民族への同化をはかる包摂の過程と少数民族に対する社会的排除のしくみに着目して、包摂と排除がいかに相互作用しているのかを捉えた。

c) 出稼ぎ者（農民工）への聞き取り調査を通じて、都市部と農村部を媒介する互助的ネットワークを明らかにした。

2) 災害文化の生成メカニズム：

復興やその後の生活再建の経緯をあとづけ、とくに経済的自立や伝統文化の復興の場面における社会関係の構築に注目しつつ、そこにどのようなアクターが関わったのかを明らかにした。より具体的には、

a) 水土流失（洪水、土壌流失）を中心とした住民の被災経験を収集し、どのような相互支援や社会的排除が行われたかを整理した。公的支援のない状況において、親族ネットワークを中心とする互助のしくみと、近隣ネットワークによる社会関係資本の再構築の過程を捉えた。

b) 国と行政の資料から、過剰な開発や環境保全の名のもとに行われる棚田建設によって、開発／環境保全政策をめぐる、政府と地域社会の間にはいかなる矛盾や相克がもたれているのかを明らかにした。公的機関の対応と、そこにおいて問題点と見なされたものを整理した。

c) 聞き取り調査および資料を通じて、行政にかかわる中間集団（村民委員会・居民委員会、宗族、芸能集団）の内実を明らかにした。具体的には、労働をめぐるローカルな規範がいかに再編され、ローカルな歴史がいかに語り直され、伝統文化がどのように組み換えられているのかというプロセスを描きだすことを通じて、災害観の変化を捉えた。

3) 開発 / 災害文化の表象 :

開発文化と災害文化がどのように相互作用しながら表象されているのかを明らかにした。国家開発であらたに創られた景観、および災害によってもたらされた景観の変化が、観光資源として新たに利用され、民族の記憶を共有するモニュメントへ読み替えられている近年の状況に着目して、棚田という文化的景観が有する政治性と権力関係を考察した。

ただし、この論点については、現地調査が思うように進展しなかったこともあり、今後の課題として積み残さざるを得なかった。

引用文献

小長谷ほか、2005、『中国の環境政策 生態移民—緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』昭和堂

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者および連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

山本早苗、2014、「中国西部におけるローカルな水の政治化 「母親水がめ」プロジェクトを事例に」『水資源・環境研究』27(2): 36-43(査読付)。

http://www.jawre.org/publication/journal/27_2.html

[学会発表](計 5 件)

山本早苗、課題報告「域学連携によるプロジェクト型地域づくりの展開 —西伊豆・松崎町石部地区を事例に—」、冬季棚田学会発表会、2014年12月13日、於 早稲田大学(東京都・高田馬場)。

山本早苗、一般研究報告「『西部大開発』において開発文化を創出する人々—甘肅省における住民参加型開発プロジェクトを事例に—」、2014年11月23日、第87回日本社会学会大会 於 神戸大学文理農学部キャンパス(兵庫県・神戸市)。

山本早苗、自由報告「半島におけるローカルな場所と記憶の継承—西伊豆・松崎町の地域づくりを事例に—」、日本村落研究学会 第62回大会、2014年11月1日、於 グリーンピア三陸みやこ(岩手県・宮古市)。

山本早苗、分科会報告「転換期社会における開発文化の創出—甘肅省における西部大開発の経験を事例に—」、日中社会学会 第26回大会、2014年6月8日、於 大同大学 滝春キャンパス(愛知県・大同市)。

山本早苗、「静岡県における広域避難者の生活状況と支援」環境社会学会・日本社会学会研究例会「福島原発事故の被害とコミュニティ：避難者・受け入れ地域の調査から」、2011年12月10日、於 関西学院大学 大阪梅田キャンパス(大阪府・梅田市)。

[図書](計 4 件)

山本早苗、2014、「第4講 棚田での稲作」棚田学会編『棚田学入門』勁草書房。

山本早苗、2013、『棚田の水環境史 琵琶湖辺にみる開発・災害・保全の1200年』昭和堂

山本早苗、2012、「流域環境としての里山 琵琶湖辺コミュニティの取り組み」牛尾洋也・鈴木龍也編『里山のガ

バナンス 里山学のひらく地平』晃洋
書房 .

研究者番号 :

山本早苗訳、2012、第 3 章「不平等な灌
漑主体：大規模な多変 量研究における
異質性とコモンズ管理」、第 11 章「コモ
ンズ制度の生成：コンテキスト，状況，
イベント」，茂木愛一郎ほか監訳，『コモ
ンズのドラマ —持続可能な資源管理論
の 15 年』知泉書館 .(原著： E. Ostrom
et al., 2002, “The Drama of the
Commons”, National Academy press,
Washington, DC).

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山本 早苗 (YAMAMOTO, Sanae)

常葉大学・社会環境学部・准教授

研究者番号：40441175

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()